終わり

電車が通り過ぎていく

耳を塞ぐ子供

声を大きくして話を続ける大人

終わりはいつもあっけなく

ただ呆然と過ぎてゆく

まるで今までがふっと吹き飛んでしまったぐらい軽く思えた

私が乗るべき電車に一歩踏み入れる

小さな隙間に落ちてしまいそうになる

少し混んだ電車内

想いに浸ってる最後の制服姿

両手に花を持った家族

みんな胸に花がある

きっとこの想いも

あの花のように枯れないだろう

ただ流れる景色なのに

こんなにも美しかっただなんて

なんで今まで気づかなかったのだろう

そっか

つい先日までは手元ばかりに目を向けていたからか

両手いっぱいのこの花が枯れても

立派になってもっと多くの花を頂けばいい